ヤク　分役。

フウシチヨジユツモクロク　富子著述目錄　一冊。癡龍富田景周の編述した書目を揭げたものである。

ブエ　武江　石川郡村井の内の小字。

ブガイ　武亥　→クロダブガイ　黑田武亥。

フカウラ　深浦　鹿島郡熊木院に屬する部落。久麻加夫都阿良加志比古神社貞應三年の立券狀に深浦一宇とあるもの是である。

フカエ　深江　羽咋郡邑知院に屬する部落。

フカエガハ　深江川　羽咋郡杉野屋領谷から流出し、吉崎領で邑知潟に注ぐ。流程五粁許。

フカエハチマンシヤ　深江八幡社　羽咋郡深江に鎭座する。貞享の由來記には、その初を知らぬが、寬永十八年氏子中から建立、宮田三百歩を寄進したとある。今單に八幡神社と號する。

フカガハコメグラヤシキ　深川米倉屋敷　江戸黑江町にあつた加賀藩の米廩。廣さ二千四百三十二歩。初め明曆三年三月町人向井六右衞門・向井彦六・升屋市郎右衞門より購うた地で、萬治元年からこゝに米倉を設置し、寶永四年十二月閣老土屋政直の許可を得て新に外圍を作り、次いでその歩數を改めて二千六百六十八歩と定めた。後寶曆十年二月の火災に土藏一棟類燒し、明和七年八月十一日・天明六年正月廿二日並びに米廩の類燒したことがあり、傳へて明治に至つた。

フカガハテイ　深川邸　江戸にあつた加賀藩の抱屋敷で、前項の深川米屋敷と別である。その境界、東は水野和泉邸、西は杉浦内藏助邸で、南は海に濱するが故に、之を元祿以前の江戸圖に稽へると、靈岸寺の所化寮と永代島邸との間に挾まる北入の地、卽ち是に當るといふ。天和三年深川邸を永代島・炮燎島の兩邸と共に幕府に納れたが、その荒廢地なるため收められず、貞享三年更めて上地とした。但しこの後の江戸圖に、尙深川邸を加賀藩の有なる如く記したものがあるのは、恐らく誤謬であらう。

フカサカ　深坂　江沼郡篠原から篠原新に至る間の坂路をいふ。

フカゼ　深瀨　能美郡白山下に屬する部落。この地檜笠を產するを以て名高い。明治廿一年の白山遊記に、『村落在二山川險阻之間一。故無二農產一。唯剝レ檜作レ笠。男女老幼擧從レ事。纖出レ于レ市以爲二家計一。而其木材不レ足。乃仰二之越前飛驒一云。』と見える。部落の東方山腹に七葉樹があり、根廻り七米八を測る。每年一半は結實し、一半は結實せず、互に相交替する。古老はこの七葉樹の繁茂する間は、部落も亦盛運を維持すると信ずる。

フカタ　深田　江沼郡北濱に屬する部落。江沼志稿に、龍野兵左衞門の館址がこの村にあると記する。

フカダ　深田　鳳至郡櫛比庄に屬する部落。

フカダ　深田　珠洲郡二子の內の小字。

フカタイシ　深田石　江沼郡橋立から產する石材。亞粘土質壤土で、黃色を帶び、稍脆弱である。

フカタニ　深谷　河北郡五ヶ庄に屬する部落。この村に鑛泉があり、深谷の湯と呼ばれてゐる。

フカタニ　深谷　羽咋郡所司原の內の小字。

フカタニ　深谷　羽咋郡藤懸郷に屬する部落。羽咋郡の最北で、將に鳳至郡に入らんとする所に在る。能登名跡志に、『富來より大福寺まで平地なり。是より劔地までは峠也。此峠の谷內に在る村を深谷村といふ。是まで羽喰郡富來の境也。是より鳳至郡仁岸の郷なり。』と記する。

フカタニガハ　深谷川　→シホガハ　子浦川。

フカタニコウセン　深谷鑛泉　河北郡深谷に在つて、一を口之湯と稱し、一を奧の湯といふ。奧の湯が古いのであるが、その開湯を文政元年と傳へるのは何か根據があることであらう。何となれば弘化中著された龜尾記に、『深谷に近年より金湯を掘出し、湯屋を建て發行す。但し其湯至つて微湯なりとて、是を涌して浴す。痼氣に能く應ずといふ。』とあるからである。今は痔疾に特効があると稱する。

フカツロク　深津錄　三冊。天正・文祿・慶長頃の說話で、前田利家・利長・利常に關することが多い。著者不詳。

フカマチカゲトモ　深町景知　大聖寺藩士。字は伯止。秋山又は臥洞と號し、文政十年を以て生まれた。初め岩原聰山に儒を學び、後東都に遊びて芳野金陵・安井息軒・鹽谷宕陰等に從遊し、安政二年藩校の句讀師となり、維新の後亦學校に敎鞭を執つた。明治十四年十月三十日五十五歲で歿。著す所、秋山詩文稿・中庸辨義・修身談・樂水閑見錄・家制要覽がある。

フカマチカゲフサ　深町景房　通稱次郎三郎。父圖書景持は和泉守といひ、朝倉氏に仕へて江州に戰死した。景房前田利長に越中に仕へ、二百石を受けたが、その子勘右衞門は浪人となつて病死し、勘右衞門の子孫市景尙に至つて、利常から百石を賜はり、利治の大聖寺分封の際これに隨從した。

フカマチマゴイチ　深町孫市　大聖寺藩士。文政九年十月藩主前田利之の命を受け、金澤に赴きて有澤流の兵學を有澤新右衞門に習ひ、皆傳を得たる後歸藩敎授した。

フカミ　深見　鹿島郡三引保に屬する部落。

フカミ　深見　鳳至郡七浦庄に屬する部落。明治二十年隣邑深見平澤分を併合した。

フカミ　深見　鳳至郡惣領の內の小字。

フカミエキ　深見驛　萬葉集に天平廿一年三月十五日越前掾大伴池主が越中守大伴家持に贈つた歌の端書に、『以二今月十四日一到二來深見村一。望二拜北方一。常念二芳德一。何日能休。兼以二隣近一。忽增二戀緒一云々。』とあり、同年(天平勝寶元)十二月十五日重ねて池主から贈つた歌に添へた書牘には、『依レ迎二驛使一事。今月十五日到二來部下加賀郡境一。面蔭見二射水之郷一。戀緒結二深海之村一。身異二胡馬一。心悲二北風一。乘レ月徘徊。曾無レ所レ爲云々。』とある。深見の驛名は延喜式に載せられるが、和名抄に之を闕き、且つ今の何れの地に當るか不明である。然るに上記の文によれば、池主は官の驛使を迎へんが爲に、越前國部內加賀郡の境上に到つたのであるが、こゝに加賀郡境といふのは、江沼・加賀二郡の境ではなく、加賀郡と越中國との界である。池主この地に來り、彼の族長にして恩人たる家持が、程遠からぬ射水郡の國府に在ることを思ひ、因つて面蔭見二射水之郷一といひ、戀緒結二深海之村一というたのである。結の字は前に緒字あるに應じ、深海は現に池主の駐る地である。深海